

どうしたら「レポート課題」に立ち向かえるようになるのか

井上 功太郎

はじめに

私の研究室には、学生が結構な頻度で訪ねてくる。そこで受ける相談のほとんどは、学問とは関係ないものばかりだ。しかし、Student friendly な教員を標榜しているので、彼らの思いを聞いてやり、必要があればアドバイスをする。

ただ、面白いもので、7月頃からは「相談」の内容のほとんどが定期試験やレポート課題になる。特に多いのがレポート課題の取り組み方であり、そんなとき、私は何に困っているかを学生から聞きだし、考え方やかつての経験などを織り交ぜて話をする。このレクチャーは、学生の求めに応じて話していく格好なので、常に断片的になってしまう。一貫性のある説明を提供したいというのが私の思いではあるが、開き直ってしまえば、学生の「レポート課題」に対するつまずきは、これらの断片にあると言えるだろう。

このエッセイでは、断片を生形の形で示すことで、学生たちのつまずきを明らかにすることを目的とする。

「レポート課題」は、何を評価されるのか

まず、「レポート課題」で教員は何を見ているかを考えてみたい。学部生に対するレポート課題における評価規準について、成瀬尚志（2016）は次のように述べている¹⁾。

私たち教員がレポート課題で見たいのは、レポートとしての完成度もそうですが、それ以上に学生がどれほど思考を巡らし、試行錯誤しながらレポート課題に取り組んだかではないでしょうか。

レポートの完成度というのは、内容における新規性や論理展開とレポートとしての体裁が保たれているかということである。だが、ここまでのレベルを学部の1、2年生レベルで求めるのは酷であろう。現実には、課題に対して、どのように考えているかを示しつつ、最適な形式で提示しているかどうかの方が重要であったりする。これは、社会で必要な能力であると言ってもいい。

レポートのタイプ

戸田山和久（2012）は、大学で課される論文について、次のような分類を提示している²⁾。

- ・ 報告型の課題

- （イ）読んで報告するタイプ

- (ロ) 調べて報告するタイプ
- ・論証型の課題

- (ハ) 問題が与えられたうえで論じるタイプ
- (ニ) 問題を自分で立てて論じるタイプ

一方で、井下千以子(2013)は、レポートの4つの型として「説明型」「報告型」「実証型」「論証型」があるとする³⁾。

このような分類は、他にも様々なところでなされているが、タイプから考えるのではなく、その課題の意図を捉え、何をどう書かなければいけないのかを考えていく方が早い。調べるだけなのか、比べて考えるものなのか、論証していくものなのかを考える。

「レポート課題」とは何かを把握する時点から、すでに課題は始まっていると言えよう。

レポート課題の体裁

レポート課題の体裁は、科目担当者から指定されることがある。注の付け方などは、その先生のスタイルがあるから注意が必要だ。また、書体や見出しのつけ方に細かい先生もいる。

もし、先生からの指定がなければ、その先生の論文を読むといい。注目すべきは引用の仕方である。直接引用が多い先生もいるし、その逆もある。基本的には、その先生のスタイルを真似て書くといい。また、句読点や記号が全角か半角かなど研究分野によって、かなり幅がある。

いい〈問い〉とは

科目の担当の先生が、レポートの〈問い〉をある程度までしぼってくれる場合もある。例えば、「〇〇は是か非か判例に基づき、考えをレポートにまとめなさい」といったものだ。だが、ほとんどが、自分でテーマを設定しなければならない。このような場合は、〈問い〉の設定そのものが、レポートの出来を決めてしまう。

戸田山(2012)は、ダメな〈問い〉として、以下の4つをあげている⁴⁾。

- (1) 一生かかっても答えが出ないような大きすぎる問題
- (2) 手がかりも研究方法をおそらくないような問題
- (3) そもそも答えがないだろう問題
- (4) 一年の執筆期間じゃ無理な問題

このうち、(1)から(3)は、〈問い〉に対して〈答え〉が設定できないものと言える。(1)も「大きすぎる問題」となっているが、「一生かかっても」とあるので、これは〈答え〉が設定できないものであると言っても問題ないだろう。例としては「近代とはどのような時代か」「私とは何か」「権利とは何か」があげられている。

(1)と(3)は、〈答え〉が想定できないので、設定してはいけない〈問い〉である。(2)については、方法論が設定できれば可能かもしれないが、現実的には難しいと言える。

一方で、(4)は、大きすぎる〈問い〉である。多くの場合、期末レポートは、1600字から2000字程度となっており、4000字程度の場合もあるが、この程度の字数では論じきれないものである。だからこそ、〈問い〉を小さくする必要である。

レポート作成の順序

レポート作成に取り組む段階で、〈問い〉と〈答え〉を決めておかない方法と決めておく方法があるが、山口尚(2020)は、後者の立場から次のようなレポート作成の手順を提出している⁵⁾。

- (I) 論考の主張をひとつ定める。
- (II) 《定められた主張を説得的に伝えるためには何を書かねばならないか》を考え、結論の主張へ至るまでのステップがどのようなものになるかを確認する。
- (III) そのステップに従って執筆する。

「実際の作業においては(I)から(III)へスムーズに進むことはめったになく、むしろ例えば(執筆開始後に、試行錯誤した結果、論文全体の主張を変更すること)などがよくあります」と述べるように、書きながらの結論の変更は、当然あり得ることである。

〈問い〉から〈答え〉を想定し、レポートを作成しつつも、〈答え〉を変更する必要がある場合は、変更し、山口(2020)のレポート作成の基本的な順序に戻っていくということを繰り返すことで、道筋をつけることができるだろう。

考えるが先か読むが先か

〈問い〉や〈答え〉を想定したり、アウトラインをつくっていったりするためには、その分野の前提知識が必須である。だが、学生からよく聞くのは、本を読むとそれに影響をもちに受けてしまうということである。前提知識なしには、考えることすらもできないので、バランスが難しいと言える。青山拓央(2022)は、自己の哲学の研究のやり方を次のように示している⁶⁾。

- ①心から面白いと思える問題や、どうしても気になって仕方ない問題について、自分で粘り強く考えて、書いてみる。
- ②自分と似たようなことを書いている文献を見つけて、熟読し、さらにそ、その文献の関連文献をいくつか読んでみる。
- ③自分の書いたものの不十分さがわかるとともに、たいていは、先行研究の不十分さ(自分のほうが深く考えられている部分があること)も分かるので、それぞれの不十分さを吟味する。
- ④少しずつ問題を絞り込みながら、①～③を何度も繰り返す。

これは、哲学の論文の書き方であるが、レポート課題においても同じようなことが言えるだろう。

先行研究から何を得るか

本を読むことは時間のかかる行為であるし、適切に行わないと無駄ばかりになってしまう。時間があれば、千葉雅也（2020）で示されている方法を用いてほしい⁷⁾が、最低限の手順として次のものが考えられる。

- (1) 大学の図書館で紙の本を一冊手に取る。目次を見て、自分のレポートに使えるところを読む。〈問い〉が大きいと読むところが多くなる。これで、その分野のおおまかなことはわかり、〈答え〉を想定するのにも役立つ。
- (2) 参考文献をチェックして、その分野の書誌情報を手に入れる。書誌情報のうちで、すぐに見られそうなら、その本なり、論文なりの参考文献をチェックする。そうやって、その分野の本の関連図を作成していく。本の関連図をつくることで、その分野で重要な文献が見つかる。
- (3) その分野の必読文献を読む。内容はおそらく難しいが、細かいことは無視して、読めたふりをする。読めたふりであっても、堂々と語れなくてはならない。

これである程度は、材料は揃えられるはずだ。ただ、後で述べるが、これで十分とはならない場合もある。それは「論証」の過程で、異なる先行研究に当たらないといけない場合も出てくるからである。

さらに、形式だけでなく、単語や文体も気に入ったものがあれば参考にする。この参考について、千葉（2021）は、次のように述べている⁸⁾。

瀬下さんが人の文体を真似して書くときがあると言っていたが、それは文章を書く人は必ず経験している方法、というか、書けるようになるために絶対にやらなければならない訓練だろう。言語は自分で発明するものではなく、基本的に真似して使うものだ。それは単語レベルでもそうだし、文体でもそうで、自分発という意識でうまく書けないなら、誰かのフォームを真似するのが早い。

実際、アカデミックの世界で使う、単語には、独自のレベルが要求されるし、文体や論じ方そのものもそうである。そういった論文独自のものは、真似をして書いていくということが、最短ルートである。

つまり、先行研究は、「自分のレポート作成に引用などで直接的に使える情報」や「この分野の書誌情報」を見つける以外にも、形式、単語、文体、論じ方の参考になる。効率的に本に出合いつつも、情報以上のものを得るという構えで文章を読む。

引用はどのぐらいが適切か

引用の量が、どの程度であるのが適切かどうかの判断は難しい。それよりも、引用が有効に機

能していないことが問題である。

文章の一部を切り取ると、一旦、文脈から切り離されてしまう。だから、その引用した文献を読んでいない読み手に対して、限りなく文脈を示していく必要となる。学生のレポートでは、どうしてその引用をしたのかがよくわからないものに出会う。引用した文章の文脈を再現しようとするれば、かなりの説明を必要とすることになるはずである。

ツッコミを入れる

レポートは、〈問い〉と〈答え〉に加えて、「論証」から成り立っている。レポートにおいてキモとなるのは、この「論証」である。

実際には、〈問い〉と〈答え〉が設定された時点で、終わったような気になってしまうが、おそらく、文章の量が書けないのは、この「論証」が十分でないためだ。「論証」とは、基本的には冗長なものである。

文系では、根拠は言語によってなされる。だから、小さな根拠を複数つなげなければ成立しない。根拠を支えるのは、裏付けとなる根拠であり、裏付けとなる根拠には、さらに裏付けになる根拠がある。

だから、自分の提示するひとかたまりの根拠が根拠になっているのか、根拠同士がどのようなつながりを持っているのかを、意識的に批判的に捉えなくてはいけないだろう。

戸田山（2012）では、反論や論証の方法について詳しく述べているので参照してほしい⁹⁾、野矢茂樹（2006）なども参考になる¹⁰⁾が、「論証」における自己反論の重要性について、戸田山（2012）は次のように述べている¹¹⁾。

自分の論証をより説得力のあるものにできるかどうかは、自分で自分にどれだけツッコミを入れることができるかにかかっている。自分の議論が批判されるとしたら、それはどこなのかを見極めて、あらかじめ批判に答えるよう努力しよう。

パラグラフライティングなどの方法もあるが、これもツッコミができるかどうかである。自分にツッコミを入れる方法の一つとして香西秀信（1995）の反論の方法をここで紹介する。香西（1995）は、次のように述べている¹²⁾。

日常表現の常として、推論の段階をすべて言語化することはせず、一部を省略して語るのは自然なかたちだからだ。その際、省略されるのは大前提とは限らない。小前提が省略されることもあれば、まれに結論が省略されることもある。ただ、われわれが最も注意しなければならないような推論の場合、反論できる可能性をもった事実認識、論者の思想や価値観などは、大前提において最もよく表現されるからだ。

これは、日常表現についての指摘であるが、学術的なものであっても同様であろう。自分が当然だと思って省略してしまっているところを見つけ出し、そこに自己反論を加えるというものである。そのときに、大前提・小前提・結論として整理するといふ。

自分の書いたものに対して、反論をしようとするこそが、論証の萌芽となるだろう。

接続詞

接続詞を使うと、書けた気がしてしまうが、接続詞や接続語は一種の飛躍を生み出す。松本修（2021）は次のように述べている¹³⁾。

つなぎ言葉は、二つのものの意味的關係が明白であれば、不要だということになる。多くの場合、特に段落冒頭のつなぎ言葉を省いても問題が生じないのはこのためである。つなぎ言葉は「ダメを押す」形で意味的關係を明示するか、意味的關係が曖昧な二つのものがある意味強引に結びつける。

無論、これは、つなぎ言葉の使用を否定するものではなく、自分の論が、つなぎ言葉によって飛躍を生み出すことになっていないかを確認する一つの方法になるということである。あまり意味をなしていない接続語や接続詞に目を向け、極力省いていこうとすることで文の流れはすっきりしてくるはずだ。

おわりに

学生たちの「レポート課題」へのつまづきを断片的に示してみたが、これらは複雑に絡み合っていて、これらのことを理解したところで、すぐに書けるようにはならないだろう。むしろ、これらの断片は、書くことを繰り返すなかで確かなものとなっていくものである。

そもそも、「あること」に対して自分の考えをもつということは、その「あること」に対する、一定の関心が必要である。

大学教員は、講義の内容に関係ありつつ、学生の関心がありそうな「あること」をレポート課題として示し、これらの断片を総動員させて書かせようとする。そのことで、学生は、それっぽいことを書いて楽に単位をもらおうという発想から、論理的に考えるという発想へのシフトが行われるだろう。

注

- 1) 成瀬尚志（2016）「なぜレポート課題について考えるのか」成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』ひつじ書房 p.5
- 2) 戸田山和久（2012）『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHKブックス
- 3) 井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法 [第2版]』慶応義塾大学出版 p.24
- 4) 戸田山和久（2012）『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHKブックス pp.69-71

5) 山口尚（2020）「レポートのひとつの書き方」

https://note.com/free_will/n/na7faac48169f（2022年7月12日確認）

- 6) 青山拓央（2022）「哲学への取り組み方について四つの質問に回答する」『現代思想』青土社 vol.50-10 p.47
- 7) 千葉雅也（2020）『勉強の哲学 来るべきバカのために 増補版』文春文庫 pp.166-205
- 8) 千葉雅也（2021）「散文を書く」千葉雅也・山内朋樹・読書猿・瀬下翔太『ライティングの哲学 書けない悩みのための執筆論』p.149
- 9) 戸田山和久（2012）『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHKブックス p.184
- 10) 野矢茂樹（2006）『新版 論理トレーニング』産業図書出版
- 11) 戸田山和久（2012）『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHKブックス pp.145-184
- 12) 香西秀信（1995）『反論の技術—その意義と訓練方法—』明治図書 p.158
- 13) 松本修（2021）「論理的な文章における段落整序課題の問題点」『Groupe Bricolage 紀要』No.39 Groupe Bricolage p.6

(いのうえ こうたろう 美作大学)